呉均と斉梁の文学集団

呉　　雨　清

On a relationship between Wu Jun and literary Groups in Qi-Liang Dynasty

WU Yuqing

Wu Jun（呉均, AD469-520）is a representative poet in the Southern Dynasty, his style of poetry was called as Wu Jun ti（呉均体）and turned out many epigones. However, studies and analyses on the literature of Wu Jun has not gone far enough. This paper tried to analyze poems exchanged between him and famous poets to check up on his relationships. From the result of this analysis, it was revealed that Wu Jun rose in the world as a poet with the endorsement of Liu Yun（柳惲）, who was interested in a new movement of literature, Yong ming Xin ti shi（永明新体詩）, in the Southern Dynasty. The Works of Wu Jun was produced under an influence of this new movement of literature and his style of poetry, Wu Jun ti, was its by-product.

KeyWord: Exchanged Poems；Jinglingbayou；Yutai Xinyong；Nobility

キーワード：贈答詩；竟陵八友；『玉臺新詠』；士族

（一）　はじめに

南朝劉宋から斉を経て梁にかけて生きた呉均（469–520）は、その文と賦十余篇（多くは残闕している）と詩一百四十余首が現存している。文は「與朱元思書」がとりわけ有名であり、また詩のうち二十六首が『玉臺新詠』に採られるなど、その文学上の業績は無視できないものある。特に『梁書』巻四十九「文學傳」上の呉均傳には、斉梁にかけて文壇の重鎮であった沈約から高い評価を受けたことが記され、また「均文體清拔有古氣，好事者或斅之，謂爲「呉均體」（均の文體清拔にして古氣有り、事を好む者、或いは之を斅（なら）い、謂いて「呉均體」と爲す）」とあり、彼の文学のスタイル「呉均體」は梁代に模倣者が続出したことを今に伝える。

このように、呉均は南朝文学において極めて重要な人物であるが、専門的研究は極めて少ない。中国で近代以前に呉均を論じた著作は皆無といってよく、朱東潤（1929）「詩人呉均」に至ってはじめて専論が発表されたといえる。その後、1980年代になると呉均を論じる論文が発表されるようになるが依然と

してその数は少なく、2000年代になって比較的多くの論文が発表されるようになった[1)]。論文以外では、林家驪（2005）『呉均集校注』が刊行され、この書によって現存する呉均の文学作品の全貌がわかるようになった。

一方、日本では南朝文学研究の歴史も古く、多くの優れた蓄積があるにもかかわらず、呉均の文学についてはほとんど論じられていない。森野繁夫（1976）が『六朝詩の研究―「集団の文学」と「個人の文学」―』において呉均を35ページにわたって論じているのが例外的なほぼ唯一の例である。

本稿では、森野繁夫（1976）の「集団の文学」という視点を用いて、上述のように特に日本の中国文学研究においてほとんど顧みられることのなかった呉均について、その文学活動の軌跡を調査し、南朝斉梁期文学史上の位置づけを試みるものである。

（二） 呉均略伝

呉均の伝記は、『梁書』および『南史』巻七十二「文學傳」に記されるが、ここでは、曹道衡（1989）にしたがって彼の文学活動を略述する。

呉均、字は叔庠（しゅくよう）、呉興・故鄣（現在の浙江省安吉）の人。劉宋・明帝の泰始五年（469）に生まれ、梁・武帝の普通元年（520）に卒した。彼の家は貧しく家柄は低く、生活のために地方を転々とした。彼の経歴のなかではっきりしているのは、寿陽（現在の安徽省寿県）にいた時期の事跡である。そこは南斉と北魏との境界であったため、戦争が絶えない場所であった。『南斉書』巻五十一「裴叔業伝」によると、寿陽は南斉・東昏侯の永元二年（500）に北魏によって陥落し、寿陽が南朝に帰したのは梁・武帝の普通七年（526),『梁書』巻二十八「夏侯亶伝」による）であり、呉均の死後である。したがって、呉均が寿陽に至った時期は遅くても東昏侯の永元元年以前である（もちろん、梁王朝の時代、呉均は従軍しており、彼も寿陽は梁と北魏が交戦する地に行っている。それが寿陽であった可能性もあるが、現存する詩や賦を見ると、平和な情景を描写しており、おそらく従軍時の作ではない)。その時、呉均は三十歳を超えており、文学的才能はすでに成熟しており、現存する作品の中では、「初至壽春作」「登壽陽八公山」「壽陽還與親故別」などの詩や、「八公山賦」などは、この時期に作られた。「初至壽春作」詩[2)] で呉均は以下のように詠っている。

桓譚不賣交　　桓譚は交を賣らず
馮子任紆直　　馮子は紆直に任かす
浮溺逐波影　　浮溺して 波影を逐ひ
飄揚恣風力　　飄揚して　風力を恣にす
北州少知舊　　北州は知舊少なく
南陽寡相識　　南陽は相ひ識る寡し

1）鄭暁暁（2014）。
2）林家驪（2005）p.130。

中駕每傾論　　駕に中たりて毎(つね)に論を傾け
當騫復摧翼　　騫に當たりて復た翼を摧かる
望美無津梁　　美を望むるも津梁無し
私自憐何極　　私かに自ら憐れみて何ぞ極まらん

この詩は、彼が寿陽に至る前にもすでに職位を得るために長期間奔走したが、仕官に成功せず、しかも寿陽に対してもまたあまり大きな希望もないことを詠っている。実際に現実は彼が予想した通りであって、寿陽の地で彼はいかなる「知音」とも出会うことはなく、「復た隅に向かう涙有り、中腸は皆涕漣たり」（「壽陽還與親故別」詩）[3] という悲しい詩句を詠いながら、その地を離れている。

呉均は寿陽を離れた後、湖南一帯に赴いたようである。「壽陽還與親故別」詩のなかに「雁は渡る　章華の國、葉は亂る　洞庭の天」という表現がある。彼は現在の湖南省の域内でさまざまな場所に行った。例えば、湘州（現在の長沙）や桂陽などである。桂陽では、当時の桂陽内史の王峻を識った。王峻が桂陽内史であったのは、南斉の末期である。『梁書』王峻伝に以下のようにある。

〔王峻〕出為寧遠將軍・桂陽内史。會義師起、上流諸郡多相驚擾、峻閉門靜坐、一郡帖然、百姓賴之。天監初、還除中書侍郎。
（〔王峻〕出でて寧遠將軍・桂陽内史と為る。義師の起こるに會い、上流の諸郡 多く相い驚擾するも、峻 門を閉ざして靜坐し、一郡帖然として、百姓之を賴る。天監初、還りて中書侍郎に除せらる。）

この記述に依れば、呉均が桂陽にいた期間は、南斉・東昏侯永元の末から梁・武帝の天監の初め（六世紀の初め）の間ということになる。

呉均は湘洲を離れたあと、すぐに故郷に帰った。しばらくして、彼の故郷・呉興郡には新しい太守がやってきた。新しい太守は、梁代の詩人としても知られる柳惲（465-517）である。柳惲はいわゆる「河東の柳氏」の出身で、その父柳世隆は斉朝の大臣であった。貴顕の家系でしかも文学を善くした柳惲は、呉均を識るとすぐに彼を召して呉興郡の主簿に補し、二人は日常的に詩を作り唱和した。ここで呉均はやっと仕官の道に踏み出したと言える。柳惲は呉興郡で太守の地位にあったのは、天監二年（503）から六年（507）のあいだであり、この期間に呉均は、梁朝が北魏に出兵する北伐に従軍したようである。それは、柳惲が彼に贈った詩から推測できる。柳惲が都、建康にもどった時には、呉均もまた建康に赴き、武帝蕭衍の弟、揚州刺史建安王、蕭偉の幕下に入って記室となり文章を掌った。天監九年（510）に、蕭偉に従って江州（現在の江西省九江）に至り、建安国侍郎に任ぜられ、さらにはその後に建康にもどり奉朝請（皇帝に謁見できる資格を有する）に任ぜられた。これより前に、呉均は武帝に上書し、齊朝の歴史を記すために齊の『起居注』『群臣行狀』の閲覧を請うたことがあった。これに対して、武帝より「齊氏故事、布在流俗、聞見既多、可自搜訪也（齊氏の故事、布いて流俗に在り、聞見既に多く、自ら搜訪す可きなり）」という詔が下された。このように『起居注』『群臣行狀』の閲覧を許されなかったため、

3）林家驪（2005）p.133。

呉均は自ら資料を収集・調査して齊朝の歴史『齊春秋』を完成させ、梁の朝廷に献上した。しかし、そのなかに「梁帝爲齊明佐命（梁武帝蕭衍は若いころ、先帝を弑逆した斉明帝の副官だった）」という記述があったため武帝は怒って『齊春秋』を「不実」と見なし、中書舍人の劉之遴に詰問させたところ、「竟支離無對（支離滅裂で、適切な対応ができなかった）」と判断され、『齊春秋』は焚書処分となった。このように『齊春秋』は焚書となり、同書は現存しないが、唐・劉知幾『史通』巻十二「古今正史」によると、呉均の『齊春秋』は私本が存在し、蕭子顯の『南齊書』（正史）とともに後世に伝えられたという。この『齊春秋』焚書事件から分かることは、呉均が『齊春秋』においてタブーに触れることを避けずに歴史的事実を記述したことが、武帝の怒りを買ったということである。これにより、呉均は職を免ぜられた。

呉均は梁の武帝に罰せられたことに関しては、これとは異なる記録がある。呉均は一度、何遜とともに武帝に謁見したことがあった。武帝が「後牖有榴柳」という畳韻を用いた一句を文官に示したところ、劉孝綽は「梁王長康強」、沈約は「偏眠船舷邊」、庾肩吾は「載匕每礙埭」、徐摛は「六斛熟鹿肉」と対句を作った。一方、何遜は、魏の曹操が背が低かったという典故を用いて「暝蘇姑枯盧」という対句を作った。そして呉均は久しく考えたが結局対句を作ることができなかった。武帝は怒り、詔を下して以下のように言った、「呉均不均、何遜不遜、宜付廷尉（呉均は均ならず、何遜は遜ならず、宜しく廷尉に付すべし）」と。この逸話は、北斉の人、陽玠松『談藪』（『太平廣記』巻二四六「詼諧」二所引）に見える。『談藪』の成立は比較的早期であるが、この書は小説の類に属するので、果たして事実であるのか疑わしい。ただ、「呉均不均、何遜不遜」の語は『南史』何遜伝にも見えるので、必ずしも捏造だとは断言できない。おそらく、『齊春秋』の筆禍事件のために、呉均は梁の武帝から罰せられたのであろう。

梁の武帝は一時、呉均を免職にしたとはいえ、彼の史書編纂の才能については一定の評価をしていたので、その後、『通史』の編纂を決定したときには、呉均を再び召して謁見し『通史』の起草を命じた。呉均は「本紀」と「世家」の二つの部分を完成させたが、「列伝」の部分を完成させずに死んだ。享年五十二歳であった。

彼の生前の著作には、『范曄『後漢書』注』九十巻、『齊春秋』三十巻、『廟記』十巻、『十二州記』十六巻、『錢唐先賢傳』五巻、『續文釋』五巻、（呉均自身の）『文集』二十巻があるが、これらはすべて散逸した。これ以外に、志怪小説『續齊諧記』一巻があるが、『梁書』の呉均傳に言及されない。現存するのは、文と賦十余篇（しかも多くは残闕している）と詩一百四十余首、そして『續齊諧記』の佚文十七条だけである。

（三） 呉均の贈答詩・応酬詩

南朝文学は、「集団の文学」と評価されることがある。森野繁夫『六朝詩の研究―「集団の文学」と「個人の文学」―』（森野1976）はこの点に注目した著作である。ところが同書のなかで、呉均は「個人の文学」に位置づけられる。しかし、呉均の詩には、楽府詩・擬古詩・詠物詩が多く、これらは、詩会など集団で作られたものと考えられる。また、贈答詩・応酬詩も多く作られていて、これは、他者との交際・交流のなかで生まれたものである。つまり、呉均の文学もまた「集団の文学」のなかで生まれた

ことは疑いを容れない。呉均の楽府詩・擬古詩について、筆者は別稿「呉均の詩と『玉臺新詠』」で論じたので、本稿では、呉均の他者との交際・交流から生まれた贈答詩を中心に、呉均と斉梁の文学集団との関係について考察したい。

呉均と詩の応酬をした人物は、以下のとおり。

1．柳惲（465-517）

作者	詩　題
呉均	「與柳惲相贈答詩六首」、「答柳惲詩」、「同柳呉興烏亭集送柳舍人」、「同柳呉興何山集送劉餘杭」、「送柳呉興竹亭集」、「迎柳呉興道中」、「和柳惲毗山亭詩」（佚句）
柳惲	「贈呉均詩三首」、「贈呉均詩二首」

柳惲、字は文暢、河東（山西省）解山の人。父、世隆は南斉の尚書令。南斉竟陵王蕭子良の法曹参軍となり、のち、蕭衍の創業を助けて功績があり、梁の天監元年（502）長史兼侍中となり、沈約らと共に新律を議定したことがある。翌年、呉興太守となった。呉均を主薄に取り立てのは、この時であろう。柳惲は貴族的教養に富み、音楽・投壺・弓術・囲碁に優れ、医学や占術にもあかるかった。武帝は、その才能を「分其才藝、足了十人。（その才藝をわかつに、十人に足了す）」と、十人分の才能に一身に持つと誉め、宴席に必ず召し寄せて詩を作らせた。呉均は武帝の知遇を得たのは、柳惲の推薦によることは間違いない。『南史』文学上、呉均伝には「均嘗不得意、贈惲詩而去、久之復來、惲遇之如故、弗之憾也。薦之臨川靖惠王、王稱之于武帝、即日召入賦詩、悅焉。（均嘗て意を得ず、惲に詩を贈りて去る。之を久しくして復た来るに、惲之を遇すること故の如く、之を憾まざるなり。之を臨川靖惠王に薦め、王は之を武帝に稱し即日召して入れて詩を賦せしめ、焉を悦ぶ）」と記す。呉均のよき理解者である。[4]

呉均は天監二年、柳惲の主薄に任ぜられた。詩題から判断して「迎柳呉興道中」、「同柳呉興烏亭集送柳舍人」、「同柳呉興何山集送劉餘杭」、「送柳呉興竹亭集」、「和柳惲毗山亭詩」六首はこの時期に作られた作品である。『南史』の呉均伝に、柳惲は「日引與賦詩（日び（呉均を）引きて與に詩を賦す）」とあるので、これらの作品はまさしく呉均と柳惲の二人が頻繁に詩を応酬した作品群の一部だと考えられる。

「迎柳呉興道中」[5] は、呉均が柳惲を出迎える時に作った詩である。

團團日西靡　　團團として 日 西に靡き
客念已蹉跎　　客念 已に蹉跎たり
長風倒危葉　　長風 危葉を倒し
輕練網寒波　　輕練 寒波に網す
白雲光彩麗　　白雲 光彩 麗しく
青松意氣多　　青松 意氣 多し

4）興膳宏編、森田浩平［執筆］（2000）『六朝詩人伝』p.603
5）林家驪（2005）p.172

所言飽恩德　　言う所　恩德に飽き
忘我北山蘿　　我をして北山の蘿を忘れしむ

「北山」は、都建康にある山、鐘山（紫金山）を指す。南斉のとき、周顒が隠居した場所として有名である（『南齊書』巻四十一「周顒傳」）。この詩の尾聯「所言飽恩德，忘我北山蘿」の表現から、呉均は柳惲から認められ、篤い恩顧をこうむっていたこと、そして、柳惲に取り立てられているので、周顒のように売名のために鐘山に隠居する必要がなくなったことに感謝していることがわかる。

「和柳惲毗山亭詩」は、佚句の二句だけ残っているので、詩全体の詳細な内容はわからないが、詩題から見て柳惲の詩に唱和した作である。これらを除いた、ほかの四首はすべて送別詩である。ここでは、以下の一首を示す。

「同柳呉興烏亭集送柳舍人」[6)]
河陽一悵望　　河陽に一たび悵望し
南浦送將歸　　南浦に將に歸せんとするを送る
雲山離晻曖　　雲山　離れて晻曖にして
花霧共依霏　　花霧　共に依霏たり
流連百舌哢　　流連して 百舌 哢び
下上陽禽飛　　下上して 陽禽 飛ぶ
桂舟無淹枻　　桂舟 枻を淹す無く
玉軫有離徽　　玉軫 徽より離るる有り
願君嗣蘭杜　　願はくは 君　蘭杜を嗣ぎ
時采東皋薇　　時に東皋の薇を采らんことを

詩題中の「柳舍人」は柳偃を指す。柳偃は柳惲の末子であり、太子舍人、太子洗馬、廬陵内史、鄱陽内史などの職を歴任した。本詩第一・二句は、この詩を制作した理由、すなわち柳偃を送別する場での作であることを読者に示し、さらに第二から六句までは、送別の宴が開かれた周囲の景色を描写し、第七・八句は、柳偃がいよいよ出発しようとする際の情景を描いている。そして、最後の第九・十句は、「蘭杜」と柳惲を褒め称えることばを用いて、その子、柳偃への祝福の言葉を送る。

この詩だけでなく、「同柳呉興何山集送劉餘杭」、「送柳呉興竹亭集」も基本的に同じような状況のもと作られた詩だと考えられる。具体的に言えば、送別の宴や詩会（詩宴）で作られた作品である。

続いて、「與柳惲相贈答詩六首」[7)] は、『玉臺新詠』（巻六）にも採られた、呉均の代表的作品である。柳惲が呉均に贈った詩も現存しており（後述）、この事実だけを見ても、両者の関係は南朝文学史においてとても重要だと思われる。そして、さらに重要なことは、この詩は、天監四年（505）十月に、梁朝が北

6）林家驪（2005）p.126。
7）林家驪（2005）p.88。石川忠久（1987）『玉臺新詠』p.392。

魏を討つ北伐の軍をおこし、臨川王蕭宏（武帝蕭衍の異母弟）が都督となり、柳惔（柳惲の兄）が副官となった時、呉均もまたこの北伐に従軍しての作品だと考えられることである（以下の2.「柳惔」の項参照）。

この六首はすべて閨怨詩的要素を濃厚に持っている。石川忠久（1987）は「六首とも女のがわからの歌と解することも出来るし、女・男・女・男・女・男と解することも出来る」と述べるが、さらに重要なのはこの六首に、辺塞詩で常用される詩語、特に地名が出てくることである。ここでは第一首を掲げる。

黄鸝飛上苑　　黄鸝　上苑に飛び
綠芷出汀洲　　綠芷　汀洲に出ず
日映昆明水　　日は昆明の水に映じ
春生鳷鵲樓　　春は鳷鵲の樓に生ず
飄颻白花舞　　飄颻として 白花 舞い
瀾漫紫萍流　　瀾漫として 紫萍 流る
書織回文錦　　書は回文の錦を織り
無因寄隴頭　　隴頭に寄するに因無し
思君甚瓊樹　　君を思うこと 瓊樹より甚し
不見方離憂　　見ず 方に憂いに離(かか)る

この詩には「昆明」池、「鳷鵲樓」とあり、詩の世界が漢の武帝の時代に仮託されている。つまり、漢の武帝の時代の匈奴との戦いが背景となっているのである。したがって「隴頭」という地名は、匈奴との戦争の最前線を示していると解釈できる。この詩は、女性が、匈奴との戦いに出征した夫を思う気持ちを詠ったもので、それを呉均が女性になり代わって作ったものである。第一首以外にも、第二首に「漳河」、第三首に「遼西」、第六首に「黄河」「隴頭」と、辺塞詩で用いられる詩語が見られる。南朝の時期、中国の西北地域を舞台として作った辺塞詩的な作品が一定の数量で出現しているが、これら辺塞詩的作品を作った南朝人は、そのほとんどが基本的には中国の西北地域に赴くことがなく、実際の戦争経験もない。しかし、呉均の経歴から考えて、辺塞詩で用いられる詩語（とくに地名）を呉均が頻繁に閨怨詩に持ち込んでいることは、呉均自身の北伐体験と関係すると判断できる。

柳惲が呉均に贈った「贈呉均詩三首」[8] のなかにも、辺塞詩的な要素が見られる（柳惲にはほかにもこれと同題の「贈呉均詩二首」[9] がある）。ただ、柳惲のこれらの詩は『玉臺新詠』には採られていない。「贈呉均詩三首」のうち、ここで第三首を掲げる。

夕宿飛狐關　　夕に飛狐關に宿し
晨登磧礫阪　　晨に磧礫阪に登る

8）逯欽立（1983）『先秦漢魏晉南北朝詩』p.1674-1675。
9）逯欽立（1983）p.1677-1678。

形為戎馬倦　　形は戎馬の為に倦み
思逐征旗遠　　思いは征旗を逐いて遠し
邊城秋霰來　　邊城に秋霰 來たり
寒鄉春風晩　　寒鄉に春風 晩し
始信隴雪輕　　始めて隴雪の輕きを信(し)り
漸覺寒雲卷　　漸く寒雲の卷くを覺ゆ
徭役命所當　　徭役　當たる所を命ぜらる
念子加餐飯　　子の餐飯を加うるを念ず

柳惲はこの詩の中で辺塞の景色や出征の将兵の辛苦を描写し、最後の一聯で「徭役命所當，念子加餐飯」という一句を加えて北伐への従軍は重大な責務だと述べ、従軍中の呉均に自分の体を労るように願っている。呉均自身の詩だけでなく、この詩の存在からも、やはり呉均は北魏との戦いに従軍した可能性は極めて高いと判断される。

2．柳惔（462-507）

作者	詩　題
呉均	「贈柳真陽」

柳惔、字は文通。柳世隆の次子、柳惲の兄である（柳惲は、柳世隆の第三子）。天監四年（505）十月、梁朝は北魏を討伐する北伐の軍を起こした。『梁書』巻二本紀「武帝本紀」中に、

冬十月丙午，北伐，以中軍將軍、揚州刺史臨川王宏都督北討諸軍事，尚書右僕射柳惔爲副。
（冬十月丙午，北伐し，中軍將軍、揚州刺史臨川王宏を以って北討の諸軍事を都督せしめ，尚書右僕射柳惔を副と爲す。）

とある。揚州刺史・臨川王の蕭宏が都督となり北伐の軍事を取り仕切るが、尚書右僕射であった柳惔は、その副官となった。前述したように、呉均もこの北伐に従軍したと考えられる。『南史』巻七十二「文學傳」の呉均傳では、柳惲が呉均を臨川王に推薦したことが記載されている。

惲……薦之臨川靖惠王，王稱之于武帝，即日召入賦詩，悅焉。
（惲……之〔呉均〕を臨川靖惠王に薦め，王 之を武帝に稱う，即日召入して詩を賦せしめて，焉を悅ぶ。）

このように、柳惲が呉均を臨川王の蕭宏に推薦し、その結果、臨川王の幕府で呉均は柳惔と出会ったと

推測される。「贈柳真陽一首」[10] は全部十四句からなる、比較的長篇の詩であり、上述の経緯から考えれば、北伐の中で作られた作品であろう。詩の冒頭で「王孫清且貴、築室芙蓉池（王孫 清くして且つ貴く、室を芙蓉池に築く）」と、柳惔が名高い門閥の出身であることを褒め称えることからはじまり、詩中はほぼすべて褒辞で溢れており、呉均と柳惔の関係は、柳惲ほど親密ではなかったことが推測される。

3．柳忱（471-511）

作者	詩　題
呉均	「贈柳秘書」

「柳秘書」はすなわち柳忱のことである。柳忱、字は文若、世隆の五子、柳惔・柳惲の弟である。最初は司徒行參軍として任官し、蕭衍が皇帝となり梁朝を立てた後、蕭衍は柳忱を五兵尚書・驍騎將軍に任命し、天監八年（509）には秘書監とした。

呉均「贈柳秘書」[11] は天監八年の作と編年され、このとき呉均は揚州刺史・建安王、蕭偉の幕下にあった。この詩の冒頭二句は「蘼蕪與丹桂，奇心復奇骨（蘼蕪と丹桂と，奇心にして復た奇骨）」と、柳忱を「丹桂」（桂樹）や「蘼蕪」（香り草）にたとえ、柳忱の品格を賛美する。また、詩の最後は「鴛鷺若上天、寄聲謝明月（鴛鷺 若に天に上らば、聲を寄せて明月に謝せんことを）」と述べ、柳忱に対して自分を推薦して欲しいという願いを表す。

以上、柳惲・柳惔・柳忱兄弟と呉均との関係を紹介してきた。寒門出身の呉均にとって、当時の名高い門閥貴族である「河東の柳氏」にこのように詩を贈ることは、自分の抜擢を求める重要な手段であったと考えられる。

4．周興嗣（469-521）

作者	詩　題
呉均	「贈周興嗣四首」、「詣周丞不値因贈此詩」、「周丞未還重贈」、「遙贈周丞」、「贈周散騎興嗣二首」
周興嗣	「答呉均詩三首」

周興嗣、字は思纂、陳郡の人。南朝斉の隆昌元年（494）に呉興太守の謝朏と文史を語り、引き立てを得て秀才に抜擢された後、桂陽郡丞となる。太守の王峻はその才能を尊んで丁重に接したという。天監元年（502）、蕭衍が皇帝に即位して梁朝を立てた後、周興嗣は「休平賦」を献上し、それが武帝蕭衍に称賛され、それによって周興嗣は安成王蕭秀の国侍郎を拝命した。天監四年には「駕鶴賦」を競作し、周の作が巧みとされて、員外散騎侍郎に抜擢される。以降、新安郡丞、給事中、臨川郡丞などの官に任ぜられた。[12]

10）林家驪（2005）p.96。
11）林家驪（2005）p.157。
12）泰田利栄子（2021）。

呉均と周興嗣の交遊についてはすでに泰田利栄子「周興嗣と呉均の贈答詩について―『千字文』以前の周興嗣―」(2021) という先行論文があるので、その詳細は、ここでは当該論文に譲ることとする。それによると、呉均と周興嗣はともに寒門出身の士人であり、若い頃は比較的親密な関係にあったが、周興嗣が呉興太守の謝朏に賞賛され、順調な官途を進むようになると、両者の関係には変化が生じ、だんだんと疎遠になっていった。南齊の末期、呉均が、桂陽郡丞であった周興嗣に会いに行ったが、会えることはできなかった。それを呉均は、周に贈った最後の詩「贈周散騎興嗣詩二首」[13]、その第二首で、

想君貴易朋　　想う 君 貴くして朋を易ふ
居然應見捨　　居然として應に捨てらるべし

と、周興嗣が順調な官途を進んで地位が高くなったら、友を変えて、自分とは付き合わなくなったことへの不満を述べている。もちろん、この呉均の詩は、南齊の末期のものであり、呉均も梁朝に入ると、柳惲の知遇を得て仕官の道に付くことができた。両者のあいだで交わされた、比較的多くの贈答詩は、呉均がまだ仕官の契機を得る前までのことで、これらから、寒門出身の士人たちの状況を知ることができる。梁代以降、この二人が交流した記録は見つからない。

5．王僧孺（463？－521？）

作者	詩　題
呉均	「入蘭臺贈王治書僧孺」

王僧孺、東海県（山東省）の人。六歳にしてすでに文章を綴ることができた。家は貧しく，母を養うためにいつも図書の書写をして糊口をしのいだ。南朝斉の時、王国左常侍・太学博士で起家。のち、竟陵王蕭子良の西邸が開かれると、王僧孺や虞義、江洪など太学生は遊賞文士となった。竟陵王のもとで、王僧孺は、蕭衍・沈約・謝朓・王融・蕭琛・范雲・任昉・陸倕ら、いわゆる「竟陵八友」と親しく交際した。南斉・建武年間（494-498）のはじめ、始安王蕭遙光の推薦により、尚書儀曹郎に任じられ、のち治書侍御史に転じた。梁の武帝蕭衍が即位した後、臨川王記室、南海太守、中書郎、尚書左丞、御史中丞など官職に任官した。王僧孺は何遜と親しく、何遜の死後、梁の天監年間の末期は何遜の文集を編んでいる。また、書家・蔵書家としても知られ、沈約・任昉とともに梁代三大蔵書家と称された。[14]

呉均「入蘭臺贈王治書僧孺」[15] は、呉均が南斉・建武年間に蘭臺（宮中の蔵書所）に行った時、王僧孺に贈った詩である。このとき王僧孺は治書侍御史として蘭臺にいた。

故人揚子雲　　故人 揚子雲

13）林家驪（2005）p.148。
14）曹道衡 沈玉成（1996）『中国文学家大辞典』p.40-41。
15）林家驪（2005）p.154。

校書麟閣下　　書を校す 麟閣の下
寂寞少交遊　　寂寞として 交遊少なく
紛綸富文雅　　紛綸として 文雅富む
予為隴西使　　予は隴西の使と為り
寓居洛陽社　　寓居す 洛陽の社
相思非不深　　相思して深からざるに非ず
行行避驄馬　　行く行く　驄馬を避けよ

首聯の上句は王僧儒を「故人」と呼び、さらに漢の揚雄にたとえる。この表現から、呉均は王僧儒を以前から識っていたものと考えられる。首聯下句「校書麟閣下」から頷聯「寂寞少交遊、紛綸富文雅」にかけては、王僧儒が蘭臺で職務に勤しんでいるさまを描写している。頸聯「予為隴西使、寓居洛陽社」は、『晉書』巻九十四「隱逸伝」に載せる董京の故事を用いる。西晉の董京は、隴西の計吏とともに洛陽に上ったあと、髪を整えずに詩を吟じながらさまよい歩き、白社という場所に暮らしたという。これは、まだ無位無官であった呉均自身の状況を描写している。尾聯の上句「相思非不深」という表現から、王僧儒と呉均の関係は以前からとても深かったものと推測される。そして、下句「行行避驄馬」は、後漢の時代、宦官が横暴を極めたが、御史の桓典は驄馬に乗り厳しく取り締まった。都洛陽の人々はこれを恐れて「行き行きて且つ止まれ，驄馬の御史を避けよ」と言ったという典故を用いる（『後漢書』巻三十七「桓典傳」）。ここでは王僧儒のことを詠っている。

6．任昉（460-509）

作者	詩　　題
呉均	「贈任黄門二首」

任昉、字は彦昇、楽安郡の人。南朝斉の竟陵王蕭子良のもとに集まった文人「竟陵八友」の一人。幼いころから学問を好み、早くから名を知られた。南斉の永明年間（483-493）、竟陵王の記室参軍に任ぜられたが、父の喪に服するために辞職した。蕭衍が皇帝に即位し梁朝を立てた後、黄門侍郎に任ぜられた。昉は交際を好み、友人を推薦し、彼の引き立てを得た者はおおむね栄達したので、仕官を求める若い士大夫たちは、皆争って彼と交わり、座上にはいつも数十人の賓客がいた。当時の人々は彼を慕い、「任君」と呼んだ。[16]

「贈任黄門二首」[17] の第一首は、任昉を司馬相如にたとえ、任昉のたぐいない才知を賛美し、任昉の推薦を得たいが、自分にその資格がないという不安な気持ちを述べている。第二首目は、任昉に対して呉均自らのことを述べ、壮年に至っているのに事業を何ら成しとげられていないことに後悔しつつも、任昉の推薦を求めている。この詩の存在から、梁の時代、任昉がどのような地位にあったことがわかり、

16）興膳宏編、大野圭介［執筆］（2000）『六朝詩人伝』p.552-564。
17）林家驪（2005）p.98-100。

呉均自身の状況もわかる。

7．王峻（466-521）

作者	詩　　題
呉均	「贈王桂陽」、「贈王桂陽別三首」、「王侍中夜集」

王峻、字は茂遠、琅邪の人。最初は著作佐郎に任ぜられたが、赴任しなかった。のち、中軍廬陵王法曹行参軍、太子舍人、邵陵王文学、太傅主簿に転じた。竟陵王蕭子良は高く王峻の才腕を買い、自分の幕下で礼遇した。父の喪に服した後、太子洗馬、寧遠將軍、桂陽内史に任じた。梁武帝天監年間、侍中に任ぜられ、のち度支尚書に転じた。王峻は風雅の人で、名利、地位を追いかけることがなかった。侍中になってもその地位に恋々とすることなく淡々としていて、蓄財にも無関心であった。

本稿第二節「呉均略伝」でも述べたように、呉均は桂陽（現在の湖南省の南）の地で桂陽内史の王峻を識った。呉均のこれらの詩は王峻が桂陽内史であった南斉の末期に作られたものである。呉均は「贈王桂陽」[18] の中に、自分のことを草に埋没した松にたとえ、さらに自分の意志を表明して、王峻から重用されることを求める。「贈王桂陽別三首」[19] は王峻と別れる際、王峻に贈った詩である。呉均は一首目で、王峻のことを楊震にたとえた。楊震は後漢の政治家で、博学・潔白な人として知られる。呉均は王峻の品格を讃頌し、さらに第二・三首目に「客子慘無歡、送別江之幹」「不見別離人、獨有相思泣」など詩句を通して、王峻との別れの未練の感情を描いた。「王侍中夜集」[20] は王峻が侍中になった後に、呉均が作った作品であり、また「夜集」というテーマから見ると、この詩はおそらく王峻が開いた宴会で作られたもので、内容は王峻の高潔な品格を賛美するものである。

8．蕭子顯（487-537）

作者	詩　　題
呉均	「和蕭洗馬子顯古意六首」

蕭子顯、字は景陽。梁の史学家、詩人。南朝斉の高帝蕭道成の孫で、豫章王蕭嶷の八男。七歳でに寧都県侯に封じられ、梁の天監元年の初め、爵位を下げられ子爵となり、最初安西外兵、仁威記室参軍など官職に任じられ、その後、太子中舎人、建康県令、国子祭酒、侍中、吏部尚書などの要職を歴任した。梁高祖（武帝）蕭衍は非常に子顯の才を愛し、またその立居振舞いや物言いを喜び、天子の宴席に子顯が侍坐すると、武帝は子顯を愛顧してやまなかった。子顯は傲慢な性格で、自分の高い才気を自負していたため、当時の士大夫たちは内心、子顯を恨んでいた。その一方、梁武帝の皇太子である蕭綱（のちの簡文）は、普段から子顯を彼の人物を重んじていた。蕭綱は、父帝とおなじように宴会では必ず子顯

18）林家驪（2005）p.163。
19）林家驪（2005）p.113-116。
20）林家驪（2005）p.84。

に近侍させた[21]。蕭子顕には著作が多いが、そのなかで『南齊書』五十九巻が最も重要である。その巻五十二「文学傳」の傳論では、「神思」を重視する文学観を主張し、また「若無新變、不能代雄（新しい変化がなければ、前代の文学を乗り越えることはできない）」と述べている。

呉均の「和蕭洗馬子顯古意六首」[22] は、辺塞詩的作品の要素を濃厚に含む閨怨詩であり、『玉臺新詠』巻六に採られ、「與柳惲相贈答詩六首」と並んで呉均の代表的詩作だと考えられる。蕭子顯の詩は、『玉臺新詠』巻八に「楽府二首」（其一「日出東南隅行」、其二「代美女篇」）、巻十に「詩二首）」（其一「春閨思」、其の二「詠苑中遊人」）が採られる。呉均が唱和したところの蕭子顯「古意」詩は現存しないが、『玉臺新詠』に収録される蕭子顯の詩は、擬古楽府詩や閨怨詩であるので、呉均詩と類似性が高い。したがってこの両者はともに同じような傾向の詩を作る人物であったと考えられ、蕭子顯「古意」詩も、辺塞詩的作品の要素を濃厚に含む閨怨詩であったろう。

ところが、林家驪（2005：271）では、蕭子顯が「洗馬」という官に就いていないことから、呉均の「和蕭洗馬子顯古意」の「子顯」は誤りであり、蕭子範（子顯の兄）であるとする。しかし、上述のような、蕭子顯の文学活動の軌跡から見て、呉均がその詩に唱和する対象としては、蕭子範ではなく蕭子顯がふさわしいと考えられる。言い換えれば、呉均が唱和した「古意」の詩の原作者は、蕭子顯であったと考えられるのである。なぜ蕭子顯に「洗馬」の職名が付されたのかについては不明だが、恐らく、呉均自身がこの「和蕭洗馬子顯古意」という詩題を書いたのではなく、この詩が『玉臺新詠』に採られたときに、現行の詩題に書き改められたのか、あるいは、後世の人によって『玉臺新詠』が再編集された際に書き改められた可能性が高いと思う。同じことは、費昶「和蕭洗馬畫屏風二首」（『玉臺新詠』巻六）についても言える。この「蕭洗馬」もまた、蕭子範であった可能性よりも蕭子顯であった可能性の方が高いと判断される。費昶は、後述するように、呉均と関係のあった人物である。

9．蕭子雲（486-548）

作者	詩　　題
呉均	「酬蕭新浦王洗馬二首」「答蕭新浦」
蕭子雲	「贈呉均詩」

蕭子雲、字は景喬。蕭子顕の弟、南朝斉の宗室である。建武四年（497）、十二歳で新浦県侯に封じられたが、天監のはじめ、爵位は子爵に降格された。出仕に関心を持たず、三十歳の時、初めて秘書郎に任職した。その後、太子舍人、北中郎外兵參軍、晉安王文學、司徒主簿、丹陽尹丞などを歴任した。当時、湘東王（のちの梁元帝蕭繹）は丹陽尹であった時、子雲を深く推賞し、布衣の交わりを維持した。

「王洗馬」は王筠（以下の10.「王筠」の項参照）を指す。「酬蕭新浦王洗馬二首」[23] は呉均が蕭子雲と王筠を送別した時の作である。第一首の「送歸日愁滿、留客袂紛吾」や、第二首の「一年流涙同、万里

21）興膳宏編、田口一郎［執筆］（2000）『六朝詩人伝』、p.631-641。

22）林家驪（2005）p.177-186。

23）林家驪（2005）p.101-104。

相思路」などの詩句から、呉均が、蕭子雲と王筠に深い親愛の気持ちを抱いていたことを読み取れる。

蕭子雲も呉均に詩を贈っている。

「贈呉均詩」[24)]

欲知健少年　　知らんと欲す 健少年の
本來最輕黠　　本來は最も輕黠たると
綠沈弓項縱　　綠沈の弓は項 縱ままにして
紫艾刀横拔　　紫艾の刀は横に拔す
誰持命要寵　　誰か持せん 命の寵を要するを
寧知敵可殺　　寧んぞ知らん 敵の殺す可きを
有功終不言　　功有るも 終に言はず
明君自應察　　明君 自ら應に察すべし

この詩は天監六年の頃に作られたと考えられている。天監六年、北伐から戻った将兵たちはみな報奨をうけた。たとえば、揚州刺史臨川王宏は驃騎將軍、開府儀同三司に任じられ、柳惔も安南將軍、湘州刺史に転じた。呉均と同時期、この北伐に従軍した丘遲も建康から戻ると中書郎に任じられた。しかし、呉均は他の将兵や文人官僚と違って、いかなる報奨を受けることがなかった。この状況に対して、呉均は「贈別新林」[25)] という詩を書いている。この詩の最後は「天子既無賞、公卿竟不知」と書いて、梁武帝蕭衍や権力者へ深い不満を表した。それに対して、蕭子雲の「贈呉均詩」のなかには、「有功終不言、明君自應察」などを書いて、不遇の友人、呉均を慰める。

この両者の詩の贈答から見て、蕭子雲と呉均はかなり親しい関係を持っていたことがわかる。

10. 王筠（481-549）

作者	詩　題
呉均	「酬蕭新浦王洗馬二首」
王筠	「和呉主簿詩六首」

王筠、字は元礼、またの字は徳柔、琅邪の人。祖父、僧虔は斉司空簡穆公であった。筠は幼いころから機敏で、七歳で文章を綴ることができた。最初は梁の中軍臨川王行參軍となり、太子舍人、尚書殿中郎に転じ、のち、太子洗馬、中舍人に累遷し、東宮の記録を管掌した。梁の昭明太子蕭統は文人たちと親しく交わり、そのなかでも王筠や劉孝綽・陸倕・到洽・殷芸らと遊宴を開いた。太子は王筠の袖を手に取って、孝綽の肩を撫で「所謂左把浮丘袖、右拍洪崖肩（所謂に左は浮丘の袖を把り、右は洪崖の肩を拍く）」と言ったという。これは王筠と劉孝綽を大いに重んじていたことの表れである。その後、丹陽

24）逯欽立（1983）p.1886。
25）林家驪（2005）p.121。

尹丞、北中郎諮議參軍に任じぜられ、中書郎に転じた。この間、武帝の命を受け、「開善寺宝誌大師碑文」を作り、また『中書表奏』三十巻および賦と頌（一巻）を作成した。尚書令沈約は、当時の文壇の領袖であったが、王筠の文章を高く評価し、自らは及ばないとした。王筠はその後、湘東王蕭繹の寧遠長史を兼ね、寧遠府と湘東王国、会稽郡の事務を代行した。以降、再び太子家令に任じられ、尚書吏部郎、太子中庶子など官職に歴任し、簡文帝蕭綱が即位後、太子詹事となり、侯景の乱のなかで亡くなった。

王筠「和呉主簿詩六首」[26] はいずれも閨怨詩で、『玉臺新詠』巻八に採られる。「和呉主簿詩六首」というタイトルから見ると、呉均が同じような作品を作った可能性が高いが、現存する呉均詩に同じようなタイトルの作品が残っていない。

王筠の詩作のなかで、呉均詩への唱和詩以外でも呉均との関係性で重要なのは、楽府詩「行路難」である。『楽府詩集』巻七十「雑曲歌辞」の「行路難」[27] には、呉均・王筠・費昶（下の15.「費昶」項目を参照」）の三人の作品が収録されている。「行路難」は南朝宋の鮑照が初めて使用した楽府題であり、南朝宋以降、南斉の僧宝月の作が一首あるものの、梁になると、呉均・王筠・費昶の三作しか残っていない。この事実、および、呉均・王筠・費昶は詩を応唱し合う関係にあったことから考えると、この三者の「行路難」は、同じ時、同じ場所で作られた可能性が高いと考えられる。

11. 鮑畿（生没年未詳）

作者	詩　題
呉均	「江上酬鮑畿」「贈鮑春陵別」

鮑畿、字は景玄、東海の人。家が貧しくて母が高齢のため、仕官のために吏部尚書王亮に拝謁し、王亮から大に賞賛を受け、春陵令となった。その後、太常丞、湘東王（のちの梁元帝蕭繹）諮議參軍を歴任した。蕭繹に「薦鮑畿表」の一文がある。

呉均「江上酬鮑畿」[28] と「贈鮑春陵別」二首[29] は、彼が寿陽を離れたあと、しばらく洞庭湖の南を遊歴した際に、この地で春陵令を務めていた鮑畿に贈ったもの。「江上酬鮑畿」には「九嶷（洞庭湖の南にある）」、「蒼梧帝（すなわち舜帝。九嶷山は舜帝の墓があるとされる所）」、「沅湘姫（舜帝の妻）」など、洞庭湖の南、言い換えれば、瀟湘に関わる典故を使い、九嶷山を訪ねたいという思いを詠った。

12. 江蒨（生没年未詳）

作者	詩　題
呉均	「酬別江主薄屯騎」

26）逯欽立（1983）p.2015-2016。
27）［宋］郭茂倩（1979）p.1449。
28）林家驪（2005）p.156。
29）林家驪（2005）p.169。

江蒨、字は彦標、済陽郡の人。幼いことから聡明で、本を読んで一度目を通すと忘れなった。最初は秘書郎を任じられ、司徒東閤祭酒、廬陵王主簿を歴任した。蕭衍が皇帝に即位して梁朝を開いたあと、臨川王外兵參軍、臨川王友、中書侍郎、太子家令など官職を経て、最後には光祿大夫の位を受けた。

呉均「酬別江主薄屯騎」[30] は、江蒨が南朝斉の廬陵王蕭宝源の主薄であったので、その時の作。詩の中まず桂樹の典故を使い、江蒨の高潔な人柄を賛美し、さらに「毛公與朱亥、俱在信陵門」と書き、江蒨を戦国時代の魏の信陵君にたとえ、最後には江蒨との別れのなごりおしい気持ちをあらわす。

13. 朱异（483-549）

作者	詩　題
呉均	「贈朱從事」

朱异、字は彦和、呉郡錢唐の人。博学のために、わずか二十一歳で揚州議曹從事史に抜擢された。その一方、権勢を誇る人にこびへつらうのが朱异の常套手段であって、梁武帝からも寵愛を得た。寒門出身でありながら、国政の中枢に三十年以上いた、武帝期の重要政治家である。呉均「贈朱從事」[31] は「朱從事」とあることから、朱がまだ若い時、のち梁の武帝期の政界で重要人物になる前の作である。

14. 周捨（471-526）

作者	詩　題
呉均	「酬周參軍」

周捨、字は昇逸、汝南安城の人。南朝斉の中書侍郎、周顒の子。広く学問に通じていて、特に経典の解釈にすぐれた。南朝斉の時、太学博士で起家、梁武帝蕭衍が即位後、尚書祠部郎に任ぜられた。その後、臨川王後軍記室參軍、秣陵令など官職を歴任した。梁初、礼儀規範を制定する時、多く周捨の提案が採用された。呉均「酬周參軍」[32] は、「江南霜雪重、相如衣服單」と、自らを司馬相如にたとえ、また、自分の不遇を表現して、周捨に理解と援助を求めている。

15. 費昶（生没年未詳）

作者	詩　題
呉均	「憶費昶」

費昶、字は不詳、江夏の人。梁の大通から中大通年間に卒したと考えられる。費昶は楽府詩にたけていて、梁朝で新しく「鼓吹曲」を制定した時、彼の作が武帝蕭衍の評価を得た。費昶はそれによって絹

30）林家驪（2005）p.117
31）林家驪（2005）p.110。
32）林家驪（2005）p.107。

十匹を賜った。また、蕭子範・子暉兄弟と詩を唱和した。呉均「憶費昶」[33] は、自分のことを「離蓬」にたとえ、友人費昶に対して、自分が漂泊の生活を送っていることの苦しみ・悲しみを訴えている。

16. 殷鈞（484-532）

作者	詩　題
呉均	「以服散鍼贈殷鈞」

殷鈞、字は季和、陳郡長平の人。恬淡とした人であり、人との交遊することも少なく、学問を好んだ。また、隷書をよくし、范雲や任昉に賞賛された。梁武帝蕭衍と鈞の父は旧友であり、それゆえに蕭衍は娘の永興公主を殷鈞にとつがせた。呉均の離別詩「以服散鍼贈殷鈞」[34] に見える「服散鍼」とは、五石散（六朝時代に盛んに用いられた散薬）を服用する時の器具を指す。呉均は服散鍼を殷鈞と別れる際の贈りものとした。

（四）　結語

呉均は寒門の出身であった。南斉「竟陵八友」の王融や謝朓のように、名高い門閥貴族の出身ではなかった。王融や謝朓は、その出自と彼ら自身が持つ文学の才能によって、南斉期の文学サロン（集団）の中心となった。一方、呉均は、自身が持つ文学の才能だけで、貴顕からの評価を得てそれによって仕官の道を得るしかなかったのである。彼の人生のなかで、柳惲（第三節の１）の知遇を得たことは大きな転機であった。柳惲は、南斉竟陵王蕭子良の幕下にあった人物であり、蕭衍・沈約・謝朓・王融・蕭琛・范雲・任昉・陸倕ら「竟陵八友」ともつながる人物である。したがって、呉均と詩を応酬した人物のなかに、上の任昉だけでなく、「竟陵八友」の周辺にいた人物（５の王僧孺、７の王峻）が含まれるのは当然のことである。

そして、呉均は沈約との詩の応酬はないものの、沈約から推賞を受けている（『梁書』文學傳）ことは極めて重要である。これはまさしく呉均が「竟陵八友」人脈のなかで沈約の存在を認識したのであろうし、呉均は、南斉から梁代にかけて文壇の領袖であった沈約から評価されるために、沈約らの「永明新体詩」を真剣に学んだはずである。

筆者は、別稿「呉均の詩と『玉臺新詠』」において、呉均の作品を詳細に分析することによって、①「呉均体」とは、どのような文学のスタイルなのか、②なぜ、呉均の詩は『玉臺新詠』に二十六首も採られ『玉臺新詠』の代表的な詩人となったのか、という二点の疑問について明らかにした。この問題、とくに①は、これまでの南朝文学研究においても諸説紛々として定説がなかったことである。別稿「呉均の詩と『玉臺新詠』」では、呉均の詩が、沈約らの提唱する声律詩「永明新体詩」のスタイルを継承するものであったこと、閨怨詩に辺塞詩的要素を取り入れたこと、などを指摘して、これらが、梁簡文帝蕭

33）林家驪（2005）p.165。

34）林家驪（2005）p.203。

綱の文学思想や、その実践作「宮體詩」と一致したため、蕭綱の主導のもと編纂された『玉臺新詠』に多く採られる理由になったと結論づけた。つまり、「呉均体」とは、「永明新体詩」と「宮體詩」とを繋ぐ文学スタイルだと考えられるのである。

本稿では、呉均の、南斉「竟陵八友」やその周辺との交際、および梁簡文帝蕭綱「宮體詩」派との交際、実際の交遊関係を具体的に調査した。この調査結果は、上記の結論の正しさを別な角度から証明するものである。

520年に没した呉均と、503年に生まれた蕭綱のあいだに直接的な交渉はない。しかし、『玉臺新詠』巻八の紀少瑜「擬呉均体応教」一首から、蕭綱の文学集団に呉均の詩が高く評価され模倣の対象となっていたことがわかる。『南史』巻七十二「文学傳」によると紀少瑜は梁簡文帝蕭綱から深い恩寵を受けた人物であり、彼の「擬呉均体応教」は、皇太子時代の蕭綱の命令に従って「呉均体」の詩を模擬したものである。呉均の詩は蕭綱によって高く推奨され模倣の対象となっていたのである。

実際の交際から見て、呉均と蕭綱を結びつけるキーパーソンが蕭子顯（8）・子雲（9）兄弟である。呉均の「和蕭洗馬子顯古意六首」は『玉臺新詠』巻六に取られた彼の代表作の一であり、呉均は蕭子顯の地位やその文学に魅力を感じていたからこそ唱和詩を作り子顯に贈ったはずである。蕭子顯は、撰述した『南齊書』巻五十二「文学傳」の傳論において自らの文学思想を開陳しているが、それは「蕭綱らと関係が密接で作風も一致している」（周勛初 2007：95）と評されている。

では、蕭綱の文学と文学思想はどのようなものであろうか、それが端的に窺えるのが、「與湘東王書」（『梁書』巻四十九「文學傳」）・「答張纘謝示集書」（『藝文類聚』巻五十八）である。まず「與湘東王書」では、京師（建康）の「儒鈍殊常（儒鈍なること常に殊なり）」「未聞吟詠情性，反擬内則之篇（未だ情性を吟詠するに、反って内則の篇に擬し）」という文学潮流を批判した。さらに、「至如近世謝朓沈約之詩，任昉陸倕之筆，斯實文章之冠冕，述作之楷模，張士衡之賦，周升逸之辯，亦成佳手，難可復遇。（近世の謝朓、沈約の詩、任昉、陸倕の筆の如きに至りては、斯れ実に文章の冠冕にして、述作の楷模なり。張士衡の賦、周升逸の弁も亦佳手に成り、復び遇ふべきこと難し）」と述べ、謝朓・沈約・任昉・陸倕ら「竟陵八友」を称揚している。さらに「答張纘謝示集書」では、「答張纘謝示集書」で「至如春庭落景，轉蕙承風，秋雨且晴。 ……伊昔三邊，久留四戰，胡霧連天，征旗拂日，時聞塢笛，遙聽塞笳，或鄉思淒然，或雄心憤薄。 是以沈吟短翰，補綴庸音，寓目寫心，因事而作（春庭の楽しき景に、風を承け轉らぐ蕙。秋雨の且に晴れとする時……伊昔三たび邊り、久しく留まりて四もに戦い、胡霧は天に連なり、征旗は日を拂い、時に塢笛を聞き、遙かに塞笳を聴くことが如きに至りては、あるいは鄉思の淒然と、あるいは雄心の憤薄たり。是を以て短き翰を沈吟し、庸き音を補綴し、目を寓め心を寫し、事を因りて作る）」と述べる。この記述から明らかに蕭綱が「辺塞」を舞台とした詩歌の重要性を認識していることがわかるし、実際に蕭綱は、辺塞詩的要素を取り入れた閨怨詩を多作し、そのほとんどが『玉臺新詠』に収録されている。そして、このような詩歌創作の傾向こそ、呉均が切り開いたものなのである。

このように考えると、呉均の文学は、森野繁夫（1976）が指摘する「個人の文学」という見方ですべて説明できるものではないことがわかる。呉均は特定の文学集団に属したというわけでもなく、文学集団の中心人物であったこともない。しかし、主に沈約ら「竟陵八友」と接触し、彼らの文学を学ぶことによって、それが結果的に「呉均体」の形成につながり、のちには蕭綱「宮體詩」派のなかに多くの模

倣者を生むことになったのだと考えられる。呉均の死後に編纂された、「宮體詩」のアンソロジー『玉臺新詠』に彼の詩が沈約に次いで多く採録されるものこのためであると考えられる。

本稿で紹介した、王僧孺（５）・蕭子顯（８）・王筠（10）・費昶（15）は、呉均と実際にどれだけ親しかったかははっきりしない。しかし、柳惲と呉均と同じく、この四名は『玉臺新詠』にその詩が採られている。このことから、彼らは同じスタイルで文学創作を行っていたのであり、一つの文学集団を実質的に形成していたと見做すことができる。それが、蕭綱らの「宮體詩体」の形成を導いたと考えられる。

参考文献

（１）［南朝梁］蕭子顯『南齊書』　中華書局（1972）
（２）［唐］姚思廉『梁書』　中華書局（1973）
（３）［唐］李延壽『南史』　中華書局（1975）
（４）［南朝陳］徐陵（編）、［清］吳兆宜（注）『玉臺新詠箋注』中華書局（1985）
（５）［宋］郭茂倩（1979）『楽府詩集』　中華書局
（６）逯欽立（1983）『先秦漢魏晉南北朝詩』　中華書局
（７）曹道衡（1989）「呉均」、呂慧鵑［等編］『中国歴代著名文学家評伝　続編一（周秦至唐五代）』　山東教育出版社
（８）森野繁夫（1976）『六朝詩の研究―「集団の文学」と「個人の文学」―』　第一学習社
（９）興膳宏編（2000）『六朝詩人伝』　大修館書店
（10）林家驪（2005）『呉均集校注』　浙江古籍出版社
（11）泰田利栄子（2021）「周興嗣と呉均の贈答詩について―『千字文』以前の周興嗣―」『人間文化創成科学論叢』（お茶ノ水女子大学）（24）
（12）周勛初（2007）『中国古典文学評論史』　高津孝［訳］　勉誠出版
（13）鄭暁暁（2014）「三十年呉均研究綜述」『戯劇之家』（18）
（14）朱東潤（1929）「詩人呉均」『新月』（第二巻第九期）
（15）曹道衡・沈玉成（1996）『中国文学家大辞典』　中華書局